

茨木市立郡山小学校 全国学力・学習状況調査分析結果

令和3年10月作成

【今年度の結果と取組みについて】

○●国語●○

(領域ごと)

- ① 言葉の特徴や使い方に関する事項 やや課題が残る結果であった
- ② A話すこと・聞くこと 概ね良好な結果であった
- ③ B書くこと やや課題が残る結果であった
- ④ C読むこと やや課題が残る結果であった

(問題形式)

- ① 選択式 やや課題が残る結果であった
- ② 短答式 概ね良好な結果であった
- ③ 記述式 やや課題が残る結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

- ・もっとも正答率の高かった設問 【三(1)エ】 短答式:漢字を文の中で正しく使う問題
- ・もっとも正答率の低かった設問 【二・三四】 記述式:目的に応じた条件付き設問
- ・もっとも無解答率の高かった設問 【三】 記述式:目的に応じた条件付き設問
- ・もっとも無解答率の低かった設問 【一・一三】 選択式:スピーチの資料の問題

分析

・漢字を文の中で正しく書き直す問題については、正答率が高いものが多く、全国の正答率を上回るものもあった。本校の漢字検定の取組みもあり、定着が成果に表れてきている。

・領域としては「読むこと」、問題形式としては「記述式」の正答率が低かった。

・もっとも正答率の低かった設問は、「資料を読み、メストラルは、何をヒントに、どのような仕組みの面ファスナーを作り出したのかをまとめて書く」問題と、続く、「資料を読み、面ファスナーが、国際宇宙ステーションの中でどのように使われているのかをまとめて書く」問題であった。どちらも目的に応じた条件付き設問で、記述式の問題である。本校児童の誤答類型を分析すると、例えば、複数ある条件のうち、ひとつふたつの条件は満たせているが、みつつ目の条件がこぼれ落ちているものが多かった。誤答の原因は、まず長い設問を読めてないこと、つぎに、その中で何を問われているのかが読み取れていないことにある。さらに、イメージしにくい「面ファスナー」という題材により、文章から気持ちが離れてしまったことも考えられる。

※対して、そうじに関する条件付き設問では、全国とほぼ変わらない正答率の結果を出せた。

〇●算数●〇

(領域ごと)

- | | |
|-----------|---------------|
| ① A数と計算 | やや課題が残る結果であった |
| ② B図形 | 課題が残る結果であった |
| ③ C測定 | 概ね良好な結果であった |
| ④ C変化と関係 | やや課題が残る結果であった |
| ⑤ Dデータの活用 | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|---------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | やや課題が残る結果であった |
| ③記述式 | 課題が残る結果であった。 |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

- ・もっとも正答率の高かった設問【3(1)】 選択式:棒グラフから数量を読み取る問題
- ・もっとも正答率の低かった設問【2(1)】 短答式:直角三角形の面積を求める式と答えを書く
- ・もっとも無解答率の高かった設問【4(3)】 記述式:12mが0.4になるわけを書く問題
- ・もっとも無解答率の低かった設問【1(1)・1(4)】 記述式:道のりの差 選択式:時刻

分析

- ・子どもたちにとって、身近な題材や現に生活でいきてくる設問に対しては、正答率が高く、無解答率が低く、概ね良好な結果が見られるものが多かった。
- ・領域として「図形」、問題形式として「記述式」に課題が見られた。
- ・もっとも正答率の低かった設問は、「直角三角形の面積を求める式と答えを書く」という図形領域のものであった。過去H!19年度の学力テストでは「底辺と高さ」の2つの情報だけ記されている問題であった。しかし、今年度のは、三角形の3辺の情報が記されており、高さも直角マークが上方にあり、三角形を傾けないと、公式に当てはめづらいものであった。本校児童の解答類型を分析すると、この3辺の情報をすべて式に使ってしまうという誤答が多く見られた。また、続く「平行四辺形の高さ、面積を書く」記述式の問題も、同じ図形領域のもので課題が見られている。この問題では、本校児童は、面積は求められていても、「高さをどのように求めたのか」という点に対しての説明が不十分である誤答が多く見られた。これら図形領域の問題は、双方とも、その図形の「高さ」への着目や決定判断が弱いものであった。
- ・もっとも無解答率の高かった設問は、「30mを1としたときに12mが0.4に当たるわけを書く」という数と計算領域のものであった。この問題は「小数を用いた倍についての説明を解釈し、ほかの数値の場合に適用して、基準量を1としたときに比較量が示された小数に当たる理由を記述する力が問われる。ただ、問題文の例文を参考にすると、工夫して解答ができるものでもあった。無解答率が高かった原因としては、長い文章の設問であったこと、また、最後の設問であったため、残り時間に間に合わず、時間をかけて取り組むことができなかったことが考えられる。

〇●経年比較●〇

全体的な傾向についての分析

- ・全国平均に比べればやや課題が残る結果ではあるが、前回のH31年度の学力テストに比べ、本校の全体的な平均正答率は上昇した。
- ・今年度、国語では「読むこと」の領域、算数では「図形」の領域での課題が目立つ。
- ・国語、算数、双方とも文章量や情報量が多い問題については、無回答率も含め、正答率が低い傾向にある。また、それらの問題形式は「記述式」のものが多く、課題である。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

- ・前回のH31年度の学力テストに比べ、学力高位層はほんの少し減少したが、学力低位層も大きく減少している。エンパワーメント層の割合も、前回に比べて下がっている。
- ・その結果、例年に比べ、今年度は学力中位層が増える結果となった。

〇●取組み●〇

学力向上に関する取組み

- ・聴き合い、学び合う子どもたちを育てるために、授業づくりを研究し、ペア、グループ学習などで友だちの意見を聴く、自分の考えを表現するなどの力をつける。
- ・校内授業研を低中高から公開し、学校全体で取り組む授業のあり方、方向性を共有し、子どもたちにつけたい力や普段の授業力向上に生かす。
- ・授業後の研究会では、ビデオの授業検証、全員発言、ふりかえりシートの活用によって、教職員全員の学びを全体に広げ、一人ひとりの教材づくりや子どもをつなぐ視点などを養う。
- ・3校合同授業研（中学校2回、両小2回ずつ）で同じ視点で授業づくりを行う。それぞれの授業づくりに参加し、3校の学びを深め、広げていく。
- ・豊川ネットワークの学力保障委員会で月に1回顔を合わせて、保幼小中連携を密にし、それぞれの取り組みを交流し、情報共有を行う。実態把握と課題の共有をし、共通実践を模索する。
- ・放課後の学びルーム、パンダ教室、なかよし教室における個別の課題に対応した取組みを毎日行うことで、学力低位層の底上げや学習内容の定着を図る。
- ・表現することを保障し、子どもどうしをつなぎ、教員が子どもとつながるための作文教育「ぬくもり作文」に取り組む。ぬくもり作文として、子どもたちにおもしろい作文をシャワーのように浴びさせて紹介し、書いてみたいという雰囲気をつくる。書きたくなったら題材を集めて作文を書く。書いたものをクラスや全校で紹介する。表現する喜びや自己解放を促し、安心して自分のことを出せる集団づくりにもつなげていく。
- ・ふりかえり週間に年間3回取り組む中で、生活のリズムや学習に対する態度を養う。学習へ向かう姿勢・準備物などの基盤づくりをクラスで話し合い、自分たちの課題として取り組む。
- ・全校縦割り学習である「こおりやニャンタイム」を実施し、高学年が低学年の問題を教える中で、低学年の学力保障をするとともに、高学年の学習に向う姿勢や優しく関わる力を育み、自尊感情を高める。
- ・「ことばのちから」ワークシートを長期休みの宿題や縦割り学習で活用する。
- ・支援教育委員会と連携し、掲示物からも、一人ひとりの子どもが安心して学び合い、わかりやすいユニバーサルデザインの授業づくりをすすめる。
- ・自主学ノートによる勉強への意欲関心を高め、自分から学習に向う態度を養う。（11月の教育月間では、児童会のよびかけによる「自主学月間」を設ける）。
- ・今年度の学力テストの国語の結果より、引き続き、火曜日の朝学で「物語や説明文を読み、条件付き設問に答えるという取組みであるショートストーリー」を行う。ただし、複数条件を含ませたものに子どもたちを慣れさせていけるように、発問を改良して作成していく。
- ・今年度の学力テストの国語の結果より、引き続き、郡山漢字検定を年3回行い、漢字の定着を図る。
- ・今年度の学力テストの算数の結果より、朝学、もしくは、モジュールの時間に、算数の基礎のおさらいや、算数の問題文に条件が加えられているような記述式の発展問題などに取組める時間を全校として確保できるように検討をおこなう。また、特に図形の領域に留意する。
- ・今年度の学力テストの算数の結果より、授業では他者に伝える機会ばかりでなく、ノートに必要な考えを整理し説明を書きまとめる機会も確保できるよう検討をおこなう。